神學生のサントトマス大學入學は、我々と行を共にした五人の神學生が自發的に現地に留つて彼の地で司祭となり、將來ともに東亜のカトリック教會の爲に盡さんと云ふのであつて、所謂交換學生の嚆矢とも云ふべく、その將來が期待されてゐる。

女子部隊は不幸にして我々と行き違ひになつたのであるが、周知の如く南方日本語教授の第一線として活躍してゐるのである。日本語を通じて結ばれて行く日比の親善關係は必ずや大なるものがあるであらう。

此等第二期に於ける任務は、宗教行政に就いては九月頃から政府のそれ〴〵の官吏が多數來島して專門の立場から次第に內地に於けると同じ樣に實情に側した宗教行政が實施せられることゝなつたし、日比親善の問題については我々はほんの橋渡しの役目を果して來たのみであつて、これは日本カトリック教團が一體となつて比島のカトリック教會のみならず、大東亜のカトリック教會に對して結ぶべき親善關係であつて、小數の我々が爲し得る限りでないのである。こゝに戰爭直後に於ける我々宗教部隊の任務は一應終了し、歸還命令を受けたのである。

(三) 宗教事情の調査其の他

尙附言すれば以上の外に、比島宗教事情の調査、反日反教會思想戰線の撲滅、對外宣傳等の仕事もやつて來たのである。

反日反教會思想戰線の撲滅と云ふのは共產主義、フリーメーソンに對する戰ひである。比島にはマニラの北方パンパンガ地方が共產黨の中心地であつて、マニラ入城直後此等首魁の檢擧に當つて情報を提供したり、此等共產黨の轉向に當つてマニラ大司教が聲涙下る演說を以て悟したことは前述の通りである。更に共產主義を最大の敵とするカトリック教會の立場から反共メッセージを散布し、民衆の覺醒を促したのである。

フリーメーソンに就いては米國がその本據だけあつて、比島には相當會員があるらしい。日本人は比較的フリーメーソンの事情にうといので、軍官の要路者及び報道陣に對しフリーメーソンの恐るべきことを說いて廻つたのである。大分理解されたと思ふ。此處には詳述を避けるが、比島の精神界を健全化するには先づフリーメーソンを完全に驅逐しなければならないと確信する。

對外宣傳と云ふのは比島の宗教が壓迫せられてゐるとなす米英の逆宣傳を完封する爲に、比島教會の實情を、皇軍によつて如何に保護され、戰前と變りがないかを全世界三億餘のカトリック信徒を通じて正しく認識せしめることである。ラヂオ、新聞等を通じて大いに材料を提供して來た。內地の方々の耳に入る以上に比島のニュースは全世界に傳へられたのである。

(三) 所感

——カトリック者と職域奉公——

最後に一ケ年の從軍と云ふ尊い體驗によつて得た所感を參考までに一、二述べることゝする。

兎角カトリック教は日本の國體に合はないとか、外來の宗教であるとか云はれて來た。所謂神社問題などを今でもまだ問題にする人に現地で二、三會つた。

然し今次大戰に於て我々宗教部隊が編成されたと云ふことを考へると、かうした事柄はもう問題ではない。我々が徵用せられたのはカトリック司祭であり、カトリック信者であるからであつて、司祭、信者でなければ出來ない職域奉公の分野が作戰の一翼として、情報宣傳の一部面として存在してゐるからである。

これは何を意味するかと云へば、日本帝國がカトリック的眞理を認識し、全世界に於ける三億餘の信徒を有するカトリック教會が常に正義の敎を以て人類を正しく導いて來たこと、世界の眞の平和を常に愛好してゐることを正しく把握した結果であつて、一方ヴアチカンに原田公使を特派して親交を深めると共に、南方にあるカトリック教會と相提携して南方の治安回復に努力せんとしてゐるからである。

カトリック者でなければ御奉公出來ない分野が、而も極めて重要な分野があると云ふことを日本カトリック信者自身が改めて認識しなければならない。國體に合ふかとか、日本の家庭に合はないとか云つてゐる時代ではない。國家がその總力の一翼としてカトリック信者の積極的協力を要請してゐるのである。

次に周知の如く南方特に比島は非常に米國化されてゐる。所謂カトリック教國でありながら、米國化の慘禍は相當ひどいものがある。この米國化を防止して來たものは何か。又之を救ふものは何かと云へばカトリック教以外にないと思ふ。

蓋し中世の殻を脱した人類が自由と云ふ理想に向つて邁進したのであつたが、その結果は餘りにも人間の自由ばかりを求め、人間のみが世界の存在であると考へ、神の存在を何時か忘れてしまつた。それが共産主義となり、個人主義となり、米國式享樂一天張りの廢頽文化となつたのである。これは文化を價値あらしめる精神たるキリスト教――神の存在を忘れてしまつたからである。

勿論比島人に對しては、東洋民族の一員としての自負と厚生とを必要とするが、カトリック教會によつて初めて民族としての統一をなし得て以來四世紀に亘るカトリック精神が民族精神となつてゐる比島人の米國化を救ふには古くして常に新しいカトリック精神を比島人の間に強く覺醒せしめることだと思ふ。

又現地に於て特に感じたことは、日本人が餘りにもカトリック教に關する知識に乏しいことである。世界の日本人として世界の宗教であるカトリック教のことを知らないのは恥である。

然しこれには我々カトリック者の責任も亦少なくないと思ふ。宣傳と云へばデマ宣傳に限ると云ふ感じを持つが、無いことを云ふのが宣傳ではない。正しい認識を與へる上に於て是非必要なことである。今や日本は世界の日本として登場してゐる時である。先づ我々同胞にカトリックに關する認識を與へることに努力しなければならない。

更に認識を與へるばかりでなく、大東亞の地域には三千万に垂んとするカトリック信徒がゐる。これらに對し四十万に足りない日本カトリック教團が指導的立場にあるのであつて、カトリック者は一人殘らず各自の分に應じて職域奉公を致さねばならない時代である。小數であつても各自の全力を盡して一致團結すれば、皇軍の精鋭が大東亞の民族を指導しつゝあるが如く、必ずや大東亞戰爭の精神的翼贊として宗教報國の實を擧げることが出來ると信じる。

（二月七日上智大學講堂に於ける歸還歡迎講演會及び三月十八日帝大カトリック研究會に於て講演せるもの）

宗教部隊の日記

昭和十六年

十二月八日　大東亞戰爭勃發。

十日　池田實師ヴイガンに敵前上陸。

二十二日　呂宋島リンガエン灣に到着。

二十四日　サンチヤゴ海濱に上陸ラユニオン州サンフエルナンド市に宿營。

池田師歸還。

二十五日　銃聲下感激のクリスマスを迎ふ。

部長成澤中佐、池田、塚本、伊東の三師ヴイガンに向ふ途中敵と遭遇之を擊退す。

二十六日　池田師、西村神學生、村岡義晴、向坊、川桐、菟原の三牧師。バギオ入城部隊と共に出發。

二十八日　塚本師サンフエルナンド教會に於て彌撒聖祭を擧行す。

昭和十七年

一月一日　サンフエルナンドを出發マニラに向ふ。

二日　マニラ東北約五粁バリンタワク着、皇軍マニラ入城。

四日　マニラ市入城イエズス會總長ハーリー師に面會。

五日　城内イエズス會經營のアテネオグレード・スクール宿舍に決定。

六日　部長成澤中佐はマニラ駐劄羅馬教皇使節館を訪問リンガエン司教マドリアガ師と會見

七日　部長成澤中佐マニラ大司教オドハテイ師と會見。

八日　飯島中尉、伊東師リパに至り司教に會ふ。

十一日　マニラ入城後最初の彌撒(塚本師サンタクルス教會に於て)及び禮拜(古田、千葉、山田、草間牧師)を執行。

部長ドミニコ會管區長トマス・タスコン師に面會。

十三日　部長本日からアウグスチン修道院外十一の修道院を歴訪總長に面會す。

十五日　部長以下全員サントトマス大學にある敵性國人收容所に至り敵性國人宣教師の釋放に立會、釋放された宣教師は軟禁狀態に置くことに決定。

十六日　伊東師、池田神學生パンパンガ地方へ、塚本師リパへ出張。

十七日　マニラ大司教館に於て第一回カトリック大會開催。

二十日　森神學生パンパンガへ出張。

二十一日　飯島中尉外二名カロカン・ノベリストへ出張。

二十二日　森神學生の報告によりマニラ共產黨主魁逮捕の端緒を開く。
二十六日　軍宣傳班に協力しタルラック及びカバナツアン方面へ伊東師、生田、金松の兩神學生、岡野護、千葉、山田、藤田、中田牧師を派遣。
二十八日　マニラホテルに於て第一回基督新教代表者協議會開催。
三十一日　マニラ市內カトリック系四孤兒院を歷訪。

二月一日　飯島、三原、兩中尉、岩手雄二、興梠牧師バギオへ出張。
四日　ロシア正教大司教テオドール師來部。
六日　三日間に亘りマニラ市內女子修道院を歷訪。
九日　タルラック・カバナツアン方面出張員歸部。
十三日　比島行政府內務部宗教局長ファブレ氏初めて來部。
十六日　三月三日迄聖公會以下新教各派の教派會議を開催せしむ。
十七日　伊東師、藤田牧師軍宣傳班と共に南部呂宋ナガ、レガスピー方面へ出張。
二十二日　塚本師サントトマス敵性國人收容所にて彌撒施行。
二十四日　聖クララ修道院內にある日本二十六聖殉教者の遺物拜觀。
二十五日　古田牧師 YMCA. YWCA の有識者に日本語教授を開講。
軍涉外班と連絡の結果教職者たる第三國人の外出證、旅行證等の發行手續を便宜當部にて代行に決定。

二十七日　聖旨傳達式擧行せらる。
二十八日　岩手雄二カトリック婦人聯盟にて日本語教授を開講。

三月一日　岡野護サンペダカレヂに於て軍宣傳班に協力し彌撒曲を錄音にす。
大阪司教田口師マニラ着。
九日　ナガ・レガスピー方面出張より歸還。
十五日　四日間に亘り村田顧問をマニラ市カトリック主要施設に案內す。
十六日　マニラホテルに於て第二回カトリック大會開催。
二十一日　赤十字託兒所視察。
二十二日　ユダヤ教會調査す。
二十四日　部長、田口司教外三名マニラ大司教の招宴に臨む。
飯島中尉、塚本師、池田神學生、岩手雄二、山田、白戶牧師をナガ・レガスピー方面へ派遣。
二十六日　池田師、西村神學生、村岡義晴バギオより歸還。
二十七日　原田公使ヴァチカンへ特派。
二十八日　部長「比島基督教徒に告ぐ」と題し放送す。
二十九日　軍宣傳班と協力し四月五日迄聖週間特別放送プログラムを作成實施す。
三十日　サントトマス大學村田顧問、成澤部長、田口司教其の他宗教部員を招待。

四月三日　聖金曜日にて部長以下キアポ教會の聖式に參列。
五日　田口司教サンタクルス教會にて復活祭の彌撒擧行、中央神學生教會に於てマニラ全新教々會聯合禮拜擧行、田口司教説教放送。
七日　アグリパイ教大司教各司教と懇談す。
九日　バタアン米比軍降服。
十二日　部長以下八名バンバンガ州マロロス及びハゴソイ方面出張。敵機禮拜中の新教々會盲爆死者二十名。
十八日　ナガ・レガスピー方面出張員歸部。
二十日　YMCAに於て基督教社會事業家會議開催。
二十四日　塚本師、生田神學生、山田、白戸牧師マスバテ島へ出張。
二十六日　男女基督教青年會合同慰問隊を組織し兵站病院を慰問す。
二十九日　天長節に當り各宗教代表當部を通じ軍司令官に賀辭を奉呈す。
五月一日　「比島カトリック教會」最高司教ロザリオ師來部。
四日　「ウニヴエルザールデ・エクレジア」創立者ヴアスコ師來部、
六日　成澤部長、田口司教、小野豐明、松川秀作、村岡義晴、相浦牧師バギオへ出張。
七日　バギオカトリック大會。

八日　コレヒドール要塞陥落。
九日　「イグレシヤ・デラ・リベルタット」司教エルモネス師來部。
十日　青木榮雄をサンフエルナンド及びタルラック俘虜收容所へ派遣。
十一日　バギオ出張員歸還。
十二日　マスバチ島出張員歸部。
十三日　聖三位獨立教會司祭ツリンガン師來部。
十五日　ベルギー人教職者の取扱ひにつき特例を認め結婚司式許可證を下附す。
五月十九日　アグリパイ教の招宴に臨む。
二十日　軍主催戰歿將兵合同慰禮祭に當り宗教界代表としてゲレロ司教參列す。
二十一日　マニラ大司教オドハテイ師皇軍に協力督勵の爲、四週間に亘り教區巡廻に出發、西村神學生同行す。
二十四日　比島基督新教聯合會組織に關し各派代表懇談會を開催。
二十五日　池田師、森神學生、藤田牧師ミンドロ島へ出張。伊東師、村岡義晴、中田牧師バタンガス地方へ出張。青木榮雄サンフアン・デ・ヂオス病院及びサンタクルス教會に於て施療開始。
二十六日　成澤部長、田口司教ローマ教皇使節ピアニ大司教の招宴に臨む。

三十日　マニラカトリック婦人會會長ガイ女史來部。
六月三日　バタンガス地方出張員歸部。
四日　部長以下十名サンタクルス方面へ出張。
七日　ミンドロ島出張員歸部。
十二日　マニラ大司教オドハティ師軍司令官及び軍政部長と會見す。
二十一日　マニラ市郊外マンダルヨングにある官立感化院視察。
二十六日　呂宋島に對する地方巡廻ほゞ完了し、ビサヤ地方へ飯島中尉、塚本、池田師、池田、西村、生田、金松神學生、山田、古田、白戸、中田牧師を派遣。
二十八日　部長以下五名グアグアへ出張。
七月一日　岡野護マニラ大司教に同行サンタリタ方面へ出張。
五日　松川秀作日本語講座放送を開始。
九日　マニラ合同教會創立十九周年記念祝賀會に出席。
二十二日　敵性國人釋放證明書收容留保證明書を新形式に交換實施。
八月一日四日　三回に亘り相浦牧師をスタッチンバーク俘虜收容所に派遣。
七日　ビサヤ地方出張員歸部。
十五日　デラ・ビラール俘虜收容所視察、田口司教訓話をなす。
　　サンタクルス教會にてマニラカトリックアクション大會開催さる。

十九日　センボーロ病院サントトマス大學附屬病院として使用許可さる。
二十五日　伊東師、森神學生、村岡義晴、中田牧師ミンダナオ島に出張。
九月十日　田口司教サンカロロス神學校で講演す。
十三日　部長田口司教以下四名タヤバス州サリアヤ町へ出張。
十七日　田口司教サントトマス大學神學生に講演す。
二十日　高山右近頌德彌撒。
二十七日　部長、田口司教以下七名、神言會キングセミナリー訪問、ペトロ・ベブチスタ師修業の地フランシスコ・デル・モンテ巡禮。
十月一日　五日間聖テレヂヤ學院にて日比兒童作品展開催。
七日～十日　比島新教基督教會聯合會創立。
二十五日　カトリック系傷病兵慰問演藝團陸軍兵站病院を慰問。
三十日　同上海軍病院慰問。
二十六日　池田、金松神學生ビサヤ地方へ出張。
十一月一日　オドンネルに於ける比島戰歿將兵慰靈祭に當りゲレロ司教彌撒施行。
十日　日比カトリック親善會結成準備の會合あり。
十二日　ミンダナオ出張員歸部。
十三日　高山右近終焉地たる不二兵營に記念碑建立。

十四日　田口司教比島官吏訓練所に於て講演す。
十八日　日比文化人の集り德川侯爵邸に開催。
十二月六日　日比カトリック親善會成立。
七日　田口司教以下十七名內地歸還の途につく。
二十一日　加藤たへ修女以下十九名の女子親善部隊マニラ着。
池田、西村、森、生田、金松の神學生勉學の爲比島に殘留。

附錄

比島の宗教事情

一、比島にはどんな宗教があるか。

二、比島は何故カトリック教國と云はれるか。

三、大東亞戰爭と宗教部隊の派遣。

四、日比親善のちぎり。

比島の宗教事情

大東亞戰爭勃發以來、所謂宗教部隊の一員として比島に從軍し、昨年末歸還する迄一ヶ年の體驗を通して知り得た彼の地の宗教事情を書いてはとすゝめられて、南方勇飛緊要の折から大東亞共榮圏にあつてカトリック教國と稱されてゐる比島の宗教事情が一般に餘り知られてゐないのに鑑み、これを紹介することも亦御奉公の一つであらうと感じ、簡單に述べることゝする。

一　比島にはどんな宗教があるか

一九三九年度比島政府の登錄によると、

カトリック教	一二、六〇三、三六五人
アグリペイ教	一、五七三、六〇八人
同　教	六七七、九〇三人

基督新教	三七八、三六一人
其の他	七五四、六九八人

であつて、カトリック教がその八割以上を占め、次でアグリパイ教、回教、基督新教の順序である。從つて比島宗教事情の特色はカトリック教が絶對多數を占めることで、所謂カトリック教國と云はれる所以である。

これを歴史的に見れば、原始宗教のあつたところへ十五世紀にボルネオを經て比律賓群島の南部から回教が傳播して來た。その勢力はビサヤ諸島を經て南部呂宋へと北上し、マニラ地方にまで及び、正に比島を回教國たらしめようとしてゐた。ところが十六世紀の初頭、スペイン人の來島によつて急激にカトリック教が全島に布教せられ、回教はミングナオ島、スール、パラワンの島嶼に留まるに至つた。その後スペイン治下末期の相次ぐ革命運動によつて惹起せられた社會の混亂とアメリカ治下初期の變轉期とに乘じて、アグリパイ教が勢力を扶植し、更にアメリカの領有と共に漸次基督新教が傳達を開始したのである。それ〳〵の宗教の現狀に就て少しく説明すると。

原始宗教

比島の民族については通説によれば、先住民族としてネグリート族がゐたところへ、インドネシア族とが時代を異にして侵入して來たのである。從つて原始宗教と云つても、ネグリート族にはネグリートの宗教があり、インドネシア族にはインドネシヤンの宗教があり、マレー族にはマレイヤンの宗教があるわけで、これを一口に云ふことは困難である。

ネグリート族には他の種族と異なつて精靈崇拜（アニミズム）は發達せず、呪術とか卜占も行はれず、唯一の原始的な至上神があがめられてゐる。

インドネシア族とマレイ族の原始宗教はアニミズムであつて、神又は精靈をアニトと稱し、その數は極めて多く、更に此等の神の上に各部族毎に至上神が存在してゐる。人間の靈魂の存在を認め、死者の靈魂は人間に善惡兩方の影響を與へると考へられてゐる。主なる宗教儀禮は犧牲と祈禱であつて、病人の恢復、幸多き航海、豐作、戰に於ける勝利、安産、結婚生活の幸福などの爲に行はれる。又自然の前兆が重んぜられ、卜占によつて吉凶が判斷せられる。

この原始宗教は北部呂宋島中央山岳地帶、ミンダナオ島の大部分、パラワン島の大部分、ミンドロ島の中央部及びレイテ島、ネグロス島、南部呂宋島の一部に住する約七十萬の比較的未開の住民の間に現存してゐるのである。

回　教

アラビヤに起つた回教が次第に東漸してマレー諸島に實勢力を持つようになつたのは、十三世紀の末であつて、比島に傳はつたのは大體十五世紀の後半である。以後十六世紀迄半世紀の間非常な發展を示し、比島全島に及ばんとする勢であつたが、スペイン人の來島によつて阻止せられたのであつた。

周知の如く、回教徒は唯一神アラーの絶對歸依の表明として日毎に五基と稱する宗教儀禮を行ふのであつて、これが彼等の生活の基準となつてゐる。その戒律や道德生活が一致團結に便である外、教祖マホメットの政治的關心やその爲のイスラム王國、イスラム法學の發達が示すように、回教に於ては政治と宗教とが不可分のものとなつてゐる。

現在比島の回教徒はミンダナオ島、スール島、パラワン島に六十萬回教圏の東端に位し、他の回教圏に較べてスルタンの勢力は強大ではないが、スールのスルタンとマギンダナオのスルタンの二人のスルタンの支配の下にあつて、スルタンの下にダトウを置き、比島の他の地域の部族に見られない團結力のある統治組織を持つてゐる。比島の回教徒は主にモロ族であつて、同じくマレイ族でありながら基督教徒たるマレイ族と峻嚴に對立し、スペイン時代は勿論、アメリカ時代に至つても比島の歴史を血を以て色どつたのは、この一般フイリッピンとモロ族との反目抗爭の歴史である。

カトリック教

一五二一年マゼランによつて比島が發見せられ、更に一五六五年レガスピーの來島とこれと行を共にしたオーガスチン修道會のウルダネタ師等によつて比島のカトリック傳道が開始せられたのである。次で一五七七年にフランシスコ會、一五八七年にドミニコ會、一六〇六年にレコレット會、一五八一年にイエズス會と相次で各修道會が來島し、此等各修道會の宣教師は基督の戰士

として愛と熱とに燃え、殉教的精神を以て比島の基督教化に挺身したのであつた。その甲斐あつて、一五八六年、レガスピーのセブ島上陸以後僅か二十一年にして當時の人口の半にあたる二十五萬人の改宗者を出したのであつた。

かくの如くカトリック教傳道の急速な成功は史上稀に見るものであつて、全く驚嘆に値する。これは古來から比島に存した神に就ての觀念の或ものが、基督教の神の觀念に似たところがあつて、基督教を受け入れるに容易であつたことゝ、スペイン宣教師の宣教魂と就中スペインのとつた政教一致の植民政策の負ふ所が大である。蓋しスペインが比島を領有するに至つた動機にはカトリックの布教と云ふことが重大な役割を爲したのである。即ちスペイン王フイリップ二世が經濟的見地から比島の遺棄をすゝめられた時、「唯一人の改宗の爲にも、予は喜んで植民地の全財産を投げ出す。」と云はれたそうである。かくてスペインの比島統治約三百五十年の間に、後述の如く比島人は東洋に類例のない基督教民族となつたのである。

現在全群島は十五の教區に分れ、男子修道會十八、女子修道會二十一、司祭二千二百餘名、修女約二千名、信徒千三百萬を算し、教會經營の大學、男女專門學校、中等學校、小學校、病院、其の他慈善施設等枚擧に遑なき有樣である。

アグリパイ教

比島の宗教の特色の一つとして類似宗教とも云ふものに基督教から離れて行つたものが三十有餘に及ぶことである。此等は大低その信徒數に於て極めて小數であつて取るに足らないものであるが、就中カトリック教に次で民衆に影響を及ぼしてゐるのはアグリパイ教である。

アグリパイ教は主として北呂宋島中央部及び南部諸島に多く、教區十、教職者三百餘名、信徒百三十萬を算す。

一九〇二年、カトリック司祭であつたグレゴリオ・アグリパイがカトリック教會から離れて比島獨立教會を樹立し、自ら最高司教と稱したのである。

教義によれば、神は全能なるも、エネルギーに過ぎず、際限なき空間を充たし、その發光によつて凡有る存在及び自然界の有りと有らゆる現象は數學的に生産せられ、誘導せられる。靈魂は想像の所産に過ぎず、知性の働きである。基督は神に非ず、又奇蹟を行はず、原罪から人類を救

濟することは出來ないとなす。又教職者の妻帶を認めるなどカトリック教義と近代自由主義生活とを巧にとりまぜて時代思潮に適應せしめたものである。

これはスペイン末期からアメリカ治下初期に亘つてスペイン人カトリック司祭が多數比島から退去した爲、カトリック司祭が不足したことゝ、國粹運動旺盛な時代を背景として宗教の比島的性格を標榜し、比島人聖職者の高位を約束したことゝ、アメリカがスペインを壓迫するの一手段としてカトリック教の弱體化にアグリパイ教を利用したことなどの原因によつて、急激な發展を見たのである。儀式、教職者の服裝など外形は全くカトリックと同樣で、一見判別に苦しむ有樣である。

基督新教

比島に於ける基督新教の歷史はアメリカ領有以來で、まだ四十餘年に過ぎない。一八九八年末、メソヂスト派ブラウチが來島して傳道を開始したのが嚆矢で、一八九九年には長老派宣教師ロジヤス博士夫妻が正式に任命されて來島した。その後一九〇〇年にバプテスト、一九〇一年に同胞派、聖公會及びデサイプル、一九〇二年に組合派、一九〇三年にアライアンス、一九〇五年にセブンスデーと、相次で來島、少し遲れて神の教會派、救世軍、ピルグリム・ポリネス、獨立宗教團、ブレマス・ブレスレンなどが渡來したのである。此等米人宣教師の努力によつて目覺しい發展をなし、信徒數は一九三六年に二十五萬、一九三九年には三十七萬を算へるに至つた。

從來とも多數分立の基督新教にあつては、時代の動きと共に合同への努力が拂はれて來たのであるが、皇軍の占領によつて、その趨勢は拍車がかけられ、小教派は次第に大教派へと合同し、更に從來の米英的色彩を清算して、昨年十月十日にはメソヂスト教派以下十三教派が統合して「比島福音教會聯盟」を結成したのである。

二　比島は何故カトリック教國と云はれるか

比島の文化は印度文化、支那文化、アラビヤ文化、スペイン文化、アメリカ文化等の影響を受けて今日に至つてゐるのであるが、就中三百有餘年に亘るスペインの徹底的な統治は比島の文化建設に最も強い影響を與へたのである。而してこのスペイン文化は悉くと云つていゝ程、スペイ

ンカトリック宣教師の力によつて移植せられたのである。即ち、

村落の建設。スペイン來島當時、比島は未だ民族的統一なく、バランガイと稱する小部族の團體から成つてゐて、海岸又は河畔に散在して生活してゐた。スペイン宣教師は先づ教會堂を建設して、これを中心に人家を集めて部落を建設し、部落と部落をつなぐ道路及び橋梁をつくり、こゝに比島村落の基礎を築いたのである。

經濟開發。又經濟的分野に於ては、宣教師がスペイン及びメキシコから新しい動植物を移入し、農業に於ては、煙草、麻、藍、穀物等の耕作方法、灌漑施設の構築法、未開地の開拓法などを傳授し、工藝方面にては、染料、煙草、纖維、樹脂などの製造法をはじめ、紡織、建築、鍛冶、印刷、製本、彫刻などの技術を教へた。

教育制度の確立。更に教育分野に於けるカトリック教會の貢献は誠に測り難いものがある。即ち一五六五年以來スペイン宣教師によつて教會堂に附屬して初等教育の機關が設けられ、主として宗教々育であつたが、スペイン語の讀み書き、算術、音樂などが教へられ、比島國民教育の礎石が据えられたのである。更に中等教育、大學教育も亦教會の手によつて起され、東洋に於ける最古の大學を誇るサントトマス大學（一六一一年創立）を始めとして、レトラン大學、アテネオ大學、デラサル大學、女子教育に於て、ヒリッピン女子大學、アサンプション學院、サンスコラスチカ學院、ホーリーゴスト學院など、これ等の諸校はその傳統と權威とを以て今日に至るまで比島教育の中核をなしてゐるのである。

從つて比島の有力者は殆ど皆カトリック教育によつて生ひ立つた人々である。一例を擧げれば、比島の愛國者ホセ・リサールは熱心なカトリックの家庭に生れ、アテネオ大學の前身及びサントトマス大學に於て勉強し、死刑に直面しては、カトリックの家に生れ、カトリックの内に生ひ立ち、カトリック者として死んで行くことに滿足を覺えつゝ刑場の露と消えたのである。比島革命運動で有名なアギナルド將軍、現在比島再建に挺身してゐるベルガス長官、レクト教育厚生部長、アキノ比島再建奉仕團副總裁、ラウレル内務部長など立派なカトリック信者で、カトリック系の學校に於て勉學した人々である。

比島人の比島精神。勿論スペイン時代の政教一致から招來せられた弊害、修道會と教區との紛爭など、スペイン爲政者の秘政と共にこれを看過することは許されない所であるが、前述の如

く、カトリック教會は比島人の大多數をカトリック教徒たらしめたばかりでなく、文化の各分野に於てスペインの豊かな過去の遺産を比島に傳へ、こゝに信仰と文化との共同地盤に於て比島民族の統一を齊し、カトリック教は何時か比島人の血となり肉となつて、實際日本人の日本精神の如く、カトリック精神は比島人の比島精神となつたのである。從つてアメリカ治下、自由主義時代に於ても教會は共産主義、フリーメーソンリー、享樂主義を敵とし、常に比島人に警告を發することを忘ることなく、カトリック教國比島の姿は嚴然として今日に及んでゐるのである。

三　大東亞戰爭と宗教部隊の派遣

大東亞戰爭勃發するや、帝國政府は南方諸民族全般に對して信教の自由を認める旨の聲明を爲すと共に、大東亞に散在する多數のカトリック信徒を考慮してヴアチアン市國へ特使を派遣し、更に大東亞圏に於て絶對多數のカトリック信徒を有する比島の實情に鑑み、特に宗教部隊を派遣したのである。

信教自由の宣明

帝國政府は開戰直後南方諸地域にある諸民族そのものを敵とせざるのみならず、本大戰は此等諸民族を長年壓迫して來た米英の勢力を驅逐して各民族をしてその所を得しめるにある旨を明にし、從つて諸民族の風俗習慣、特に彼等の信奉する宗教はこれを尊重擁護する旨を宣明したのである。即ち軍當局に於ても宗教は原住民の心底に深く滲透し、その信仰心亦極めて旺盛なるに鑑み、在來の宗教は統治に妨げなき限り、これを保護するの方針をとり、又信仰に基く風習は努めてこれを尊重し、以て人心の安定、民心の把握に資せんことを明にしたのである。

この聲明は從來米英が若し日本軍來らば、基督教を斷壓迫害せんと盛んに宣傳してゐたのに對し、比島人に非常な安心を與へたのである。

ヴアチカンへ原田公使特派

又昭和十七年三月二十七日には左の如く外務當局談を以て、フランス大使館參事官原田健氏を

初代特派公使としてヴアチカン市に特派することに決定したと發表せられたのである。「今般政府は羅馬法王廳との友好關係を一層緊密ならしめる目的を以て原田公使をヴアチカン市へ特派するに決定した。現下世界の情勢に鑑み且大東亞圏内に多數のカトリック教徒を包含する實情等より見て、帝國と法王廳の親善關係が增進せられ連絡が一層緊密化せられることの有意義なるはあへて贅言を要せざるところである。」と。

これは帝國政府がカトリック教に對して有する理解と好意とを最も端的に表明したものであつて、全世界三億餘のカトリック信徒に對して、就中比島教會に對して與へた好感は非常なものがあつた。

宗教部隊の派遣

これより先、皇軍が比島に上陸するに當つて、此等第一線部隊に伍して、既に蒙疆に於て宗教宣撫の實際に當られたことのある成澤中佐を首班とする日本カトリック司祭、塚本、池田、伊東の三神父、神學生及び信徒からなるカトリック班と日本人牧師からなる新教班とよりなる宗教部隊を派遣し、帝國の宗教擁護に關する前記の聲明を實效あらしめたのである。

特に宗教部隊を編成したことは恐らく世界歴史上嚆矢であつて、開戰直後十二月十日には池田神父が先遣部隊と共に比呂宋のヴイガンに敵前上陸して比島人司教サンチヨ師と共に宗教宣撫に當つたのを第一歩として、十二月二十四日には宗教部隊の主力が中部呂宋のリンガエン灣に上陸してラユニオン州のサンフエルナンド一帶の宣撫に當り、一月二日にはいち早くマニラ市に入城し、此處に本據を定めて活動を開始したのである。三月一日には大阪司教田口芳五郎師を迎へて一層の力を加へ、爾來一ケ年間、マニラ市は勿論、治安未だ完からざる呂宋島からヴザヤ諸島ミンダナオ島に及ぶ殆ど全比島に亘つて皇軍の眞意を徹底せしめると共に、教職者の保護、教會施設の擁護に當つた。

即ち皇軍は如何なる激戰中に於ても教會堂、禮拜堂、教會關係建物及び教職者の保護に一方ならぬ努力を拂ひ、皇軍の武器によつて致死せる宗教家は一名だになく、敵の焦土戰術の犧牲となつたか、不良なる比島人の放火によるか、敵の據點たりし以外は皇軍によつて破壞せられた教會堂又は教會關係建物の一つも無かつたことは世界戰史に特筆せらるべきである。

その結果、山間その他に逃避してゐた一般民衆は續々として歸還し、カトリック司祭は一時逃避した者もあつたが、大體に於て自己の教會修道院學校等に踏み留まり、皇軍の到來に當つては出來るだけの便宜を提供し、民衆の歸還に協力して來たのである。又カトリック教首腦部中、マニラ大司教オドハチイ師は六十八歳の老軀に鞭打つて、戰跡地の教會を歴訪し、生業復歸運動を展開し、千五百名の共産黨員の轉向に當つては聲涙下る大演説を以て懇々と説したのであつた。又セブ大司教レイエス師が皇軍のセブ入城に先だつて、在留邦人を救出したことは當時既に報道せられたところである。

かくて宗教部隊は同じ信仰を通じての民心の把握、日比親善に多大の效果を擧げることが出來たのである。

田口司教の渡比

特に帝國政府が高位聖職者である司教を派遣したことは、比島教會に對しては勿論、ローマ聖廳に對して非常に好感を與へたのである。昨年十月十日の同盟電報はヴアチカン聖廳筋に於て、比島に派遣されることになつた日本カトリック婦人の擧を喜ぶと共に、先に大阪司教田口師が比島に派遣されてゐることに對し滿足に思ふ旨を傳へたのであつた。

かくの如く開戰以來帝國政府が宗教に對してとつた處置、即ち信教自由の公認、宗教部隊の派遣、ヴアチカン特使の派遣は、前述の如き比島の宗教事情からみて極めて適切有效なるものであつて、全世界に對し帝國今次の大戰が正義に立脚せる公明正大なる所以を明にしたものである。

四　日比親善のちぎり

抑々日比の交通は歴史的には極めて古いものであつて、日比カトリック教會の關係も亦所謂切支丹の時代に遡るものであるが、前記宗教部隊の活躍が動機となつて、日比のカトリック教會を末長く結ぶものとして昨年十二月六日、早くも日本と南方地域との最初の文化的握手、日比カトリック親善會の結成を見たのである。

こゝに於て日本カトリック教團にあつては、獨り比島のみならず大東亞の各地に司祭信徒が派遣せられてゐる實情に鑑み、日比の關係を軸とし、主として大東亞三千萬になん〳〵とするカト

リック信徒に對して同一の信仰による相互の親善を深め、共榮の實を擧げるべく、去る天長の佳節をトしてカトリック中外親善會を設立したのである。本會は東京大司教を總裁に、大阪及び長崎司教を副總裁に戴き、稲畑勝太郎氏を會長に、堀三也氏を副會長とする日本カトリック信徒の大同團結であつて、日比親善も一に懸つて本會の活動に俟つものである。

既に比島に對しては交換學生の先驅として日本神學生五名がサントトマス大學に於て勉學にいそしんで居り、昨年末には日本語教師として日本カトリック修女及び信徒からなる十九名の女子部隊がマニラに到着し、カトリック關係教育施設に於て日本語の普及に挺身してゐるのである。

戰火未だ消えやらぬ間にあつて、着々として日比の親善關係がカトリック教會を通じて深められつゝあることは、カトリック教國比島の爲に慶賀に堪えない所である。

（一八、五、二〇）

昭和二十年十二月二十日印刷
昭和二十年十二月十五日發行

（二〇〇〇部）
定價金貳圓五拾錢
特別行爲稅相當額貳拾錢
賣價金貳圓七拾錢

著者　小野豐明
發行者　東京都麹町區六番町十ノ一　内野作藏
印刷者　東京都麹町區六番町十ノ一　一曾連
配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發行所　東京都麹町區六番町十ノ一　中央出版社　代表者　内野作藏
會員番號三三〇〇八三番
振替東京六二二三三番

日本出版會承認う150089
比島宣撫と宗教班

印刷、製本、中央出版社印刷部（東京 1228）

1008
E
73

I-I 301-36